

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第519号 平成25年3月29日

## 教える事の難しさ（2）

北海道師範塾が主催している「教師養成講座」の1期生12名が、いよいよ正式の教師として教壇に立つことになりました。先日、極ささやかにお祝いの会を開いたのですが、参加した1期生の皆さんの顔はいずれも晴れ晴れとしていて、それぞれの任地に送り出す側の我々としても、やって良かったなという思いを深くしています。

私は教師の経験がありませんので、教師の本当の苦労も喜びも実感した事はないのですが、師範塾の活動を通して教師の真似事をしながら、ほんの一部に過ぎませんが、教師の皆さんが感じている喜びをほんの少し体感しています。そうした気分になれるのも、難関の採用試験を突破してくれた受講生のお蔭であり、感謝しています。

しかし、教師の真似事をしていると感じるのは、喜びだけではありません。むしろ、教師を目指す若い方々に、自分の思いを伝える事の難しさにも直面しています。

一番の難しさは、何といても結果がはっきりと見えてしまう事でしょう。「我々はボランティアでやっている事だから」といっても、誰も許してはくれません。いい加減な気持ちでやっでは、受講生の皆さんには申し訳が立ちません。これは、「教師養成講座」を実施しているスタッフに共通の思いです。

ただ、教えるという事と結果が必ずしも結び付くとは限りませんので、1期生についても非常に心配でした。結果は4割が合格しましたのでホッとしていますが、逆に、2期生はどうなるか別のプレッシャーが掛かっています。また、4割合格とはいっても、一方では6割が失敗したという事ですから、思いは複雑です。

第1期は、試行錯誤の連続でした。一番感じたのは、主催する我々の思いが強過ぎて空回りしていたかもしれないという反省があります。また、我々は公務員予備校のような活動を目的としてはいませんが、それでも、もう少し効果的な講座展開を考える必要も感じたところです。

こうした反省に立って、第2期は講座の組み立てを大幅に変更してスタートしています。PDCAを念頭に実践しているつもりです。いずれにせよ、成果が出るかどうかは結果を見る迄は分かりませんので、恐ろしい事です。

私も、幾つかの講座を担当して受講生にお話をしていますが、1時間というまと

まった時間話をするというのは、普段人前で話をする機会がない身としては、容易ではありません。分かりやすく、必要な内容を伝えるにはどうするか、資料作りから、話の組み立てまで考える事が多くて大変です。しかも、事前に考え、準備したからといって、受講生の反応が良かったかどうかは別物で、今一つの反応でがっかりする時もあります。学校の先生は、日々こういう思いをしながらやっているのかと思うと、改めてご苦労様といたい気分です。

「教師養成講座」を受講している方々は、いずれも目標が明確ですから、その意味では話しやすい事は間違いありませんが、それでも受講生が30人もいれば、それぞれのキャリアも違えば、採用試験に向けた気構えも違います。受講生の中の温度差を感じながら、なお、全員に我々の思いを浸透させる事の難しさを痛感しています。

先日、模擬テストをやったところ、事前に通告していたにもかかわらず出来は散々で、受講生の皆さんはかなりショックを受けていたようですが、我々の方のショックも相当なものでした。

目標がはっきりしている受講生を相手にしてこうですから、各学校で子ども達を教えている先生方のご苦労はさぞかしと思います。

受講生の温度差を埋めるのは、当人達の気持ちもさりながら、やはり、受講生と相対している我々の力量、彼らの気持ちをこちらに引きつけるだけのパワーが必要なのだ改めて感じているところです。ただ「ガンバレ」とか「しっかりやれ」というだけではエンジンがかからないというのは、どの世界でも同じだと思います。そういう意味で、採用試験で試されているのは受講生だけではなく、我々もまた試されているとあってよいでしょう。

本番の採用試験は、7月です。まだ3か月あるではなく、もう3か月しかないというべきです。焦る必要はありませんが、アクセルは踏み込む必要があります。

受講生の皆さんには、忙しくて大変だろうと思いますが、「教師になる」という夢の実現の為にもう一踏ん張りして欲しい、1期生の晴れ晴れとした顔を見ていて、その事を特に強く感じています。(塾頭：吉田 洋一)